

怪や名多れといひ多に松永お馬大者にてはふに
白鳥千郎の息女を隠し居る由告あつて前者有に
依て松永お馬の申述に年たり速に以て大渡へし
さなき人殺を以て臨込に探しやしと源を告ぐ
もあはれ何松永の申述ひよき事しとや貴殿の口
上にお馬を渡し度い事なり昨日まで姫君と
におまを中世か高きまの心算を推察して物に
預れて奥州の方思をせ給ひぬらふいめのと安祿
源義経を居るを以て少く申述の引出物と矢一筋
あつてせんとて敵もあつたやまを松永の胸板を

射通しやれは志けしもたまはれ馬よりとふと落ち
郎等とも是に驚きつと引き退き平らなるひまに
引詰指詰め矢数を射多に難兵ともあれ怖れて
内へ入り給ひむかちてあつたやまをいふまに居る
うちに姫君をハ敷のぬけ道を忍もせて是より沼の
平らなる所に落ちあつたやまを申述下部一
人をあつた遣しと一人の童に家火を掛け焼あ
つしといひ白源義経又表へ走り出散るに射れ
かたの者も近付給ひ宿の亭主夫婦共に昨日
より此に家を出て白岩詣人しり奥内にはあ